令和６年度入学　社会福祉学部　編入学（推薦）試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	―	吉見　俊哉	大学は何処へ　未来への設計	2021年 P187-191より一部改変	岩波書店

令和６年度　編入学（推薦）

社会福祉学部

小　論　文 （120分）

注 意 事 項

１．**試験開始の合図があるまでは，この問題冊子の中を見てはいけません。**

２．この冊子は，**２ページ**あります。なお，下書き用紙が２枚あります。

３．試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明，ページの脱落などがあった場合は，手を挙げて試験監督者に知らせなさい。

４．解答は，必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し，ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。

５．**解答用紙には，氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。**

６．**解答は，必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。**

７．下書きの必要があれば，下書き用紙を利用してかまいません。

８．試験終了後，問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み，あとの問いに答えなさい。(配点 50 点)

かつて平均寿命が 60 歳程度であった時代，小学校から大学までの約 16 年の修学期間は，人生の約 4 分の 1 を占めていた。大学卒業後，仕事を始めたり家庭を持ったりした人が，50 代後半まで働き続ければ 30 年余となる。つまり，大学まで進んだ者は人生の 4 分の 1 を学びに，半分を仕事や家庭生活に当てていた。この比率を 80~90 歳にまで延びた人生に当てはめるなら，学びの時間は約 21~22 年となり，平均でも 5~6 年は延びる。これは，もちろん同じような比率で仕事の期間も延びた場合で，仕事の期間の延びがもっと少ないなら，学びに当てられる人生の時間はもっと長くなる。つまり，長寿化する人生のなかで学びの時間をどう設計するかは，21 世紀の私たちの人生の帰趨(きすう)を決めるほどに重要な問いなのだ。

リンダ・グラットンとアンドリュー・スコットの『LIFE SHIFT』は，この寿命が 100 歳近くまで延びる社会の人生戦略について影響力のあるビジョンを示した著作である。同書は長寿化によって「老後」とされてきた人生段階のありようが根本的に変わり，人々は「マルチステージの人生」を過ごすようになるという。

近代化以降，多くの人々が「学習」「仕事」「老後」という 3 つのステージの間の移行を当たり前のものとして受け入れてきた。しかし，こうして 3 つのステージで分節化される人生があまねく浸透したのはそう古いことではない。18 世紀までの世界では，多くの人々に「学習」や「老後」という段階は存在しなかった。ところが 19 世紀末以降，社会全体の産業化と寿命の延び，学校教育の長期化によって「仕事」の前と後に比較的長い「学習」や「老後」の期間が誕生した。20 世紀を通じてこの「学習→仕事→老後」という順番に人生を歩んでいくモデルが全世界化し，「同世代の人たちが隊列を乱さずに一斉行進することにより，確実性と予測可能性が生まれ」ていった。この確実性や予測可能性こそが産業社会の生産力を支えていたのであり，人々も「機会と選択肢の多さに戸惑う」ことなしに済んでいた。

このような人生サイクルが，人生 100 年時代には崩壊する。「マルチステージの人生が普通になれば，私たちは人生で多くの移行を経験するようになる」と，グラットンらは言う。これまでは「学習→仕事」「仕事→老後」という 2 回だった移行が，3 回，4 回と増えていくのである。多くの人に，何度も「新しい人生の節目と転機が出現し，どのステージをどの順番で経験するかという選択肢」が劇的に拡大するのだ。人々は「仕事を長期間中断したり，転身を重ねたりしながら，生涯を通じてさまざまなキャリアを経験」していく。この人生構造の転換がもたらす最大の変化は，「年齢とステージがあまり一致しなくなる」ことである。これは大きな変化で，この対応が崩れると，これまで年齢とライフステージがある程度は対応することを前提に構築されてきた様々な制度が根底から怪しくなる(『LIFE SHIFT』)。

個人のレベルでも，大きな問題が浮上する。「マルチステージ化する長い人生の恩恵を最大化するためには，上手に移行を重ねること」がポイントとなるにもかかわらず，現状では「ほとんどの人が生涯で何度も移行を遂げるための能力とスキルをもっていない」のである。移行を上手に重ねるには，それぞれの人が「柔軟性をもち，新しい知識を獲得し，新しい思考様式を模索し，新しい視点で世界を見て，力の所在の変化に対応し，ときには古い友人を手放して新しい人的ネットワークを築く」ことができなければならない

(同書)。

かつてデイヴィッド・リースマンは，消費社会における人々の社会的性格の変容を，自らの「羅針盤」に従って一方向に歩み続ける「内部指向型」から他者たちの評価を絶えず気にしながら「レーダー」を働かせて軌道修正していく「他人指向型」への転換として特徴づけた。日本にそもそも「内部指向型」がどれほどいたのかは微妙だが，この国ではタテ型社会の同調圧力が結果的に人々をまるで羅針盤に従っているかのように同方向の人生に仕向けてきた。ところが(1)そのような社会の仕組みが，長寿社会では徐々に無効化するのである。

長寿社会で人々が獲得するように促されるのは，もはや羅針盤でもレーダーでもなく多面的な複数の役をこなせる変身術である。産業化による経済成長期が終わり，低成長のなかで人生の長さが大幅に延びていくと，これまでのような単線的な人生設計は不可能になっていく。ポスト近代の社会では水平的に多数のキャリアが並行し，流動的な状況のなかで人々はその 1 つのキャリアから別のキャリアへと移動する柔軟性を身につけなければならなくなっていく。

その結果，一方で個人の側では，「人生が長くなり，人々が人生で多くの変化を経験し，多くの選択をおこなうようになれば，選択肢をもっておくことの価値が大きくなる」。私たちは何かを選択するとき，同時に何かをしないことも選択しているのだが，それを固定的にするのではなく，他方のオプションを残しておこうとし始める。たとえば，就職も結婚も必ずしも一生を決めるものとはならなくなっていく可能性が高い。こうして若者たちは，「選択肢を狭めないように，将来の道筋を固定せずに柔軟な生き方を長期間続け」，その先でも自分の人生が「一定の行動パターンにはまり込むのを避ける」ようになる。他方，社会的には，年齢とライフステージが一致しなくなることにより，「異なる年齢層の人たちが同一のステージを生きるようになって，世代を越えた交友が多く生まれる」(同書)。つまり，マルチステージ化した社会とは，世代の関係構造が根底から変化していく社会なのである。

要点は，個人の人生も社会の仕組みも柔軟化していくことであり，そのために(2)社会には世代を越えた風通しのよさが，個人には変化に対応できる変身術が求められていく。

（吉見俊哉『大学は何処へ 未来への設計』，岩波書店， 2021 年，pp.187-191 より，一部改変）

問１　下線部(1)「そのような社会の仕組み」とはどのような仕組みであるか。個人と社会の両方に触れたうえで，作者の考えを踏まえ，120 字以上 150 字以内で説明しなさい。

問２　作者は，下線部(2)「社会には世代を越えた風通しのよさが，個人には変化に対応できる変身術が求められていく」と述べているが，これまでの社会とはどのように異なるのか，具体例を用いて説明しなさい。そして，変化後の社会では，福祉はどのような形で人々に関わることになるのか。あなたの考えを 700 字以上 800 字以内で説明しなさい。